

2022.1.11

担当:大学生 M

一九七八年三月二十二日

ミシェルフーコー、高桑和巳訳, 2007『ミシェル・フーコー講義集成〈7〉コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978 年度「安全・領土・人口」』, 筑摩書房

【前回までの復習】(p. 355-p. 357 うしろから 5)

- 統治的理性の出現がしかじかの思考・推論・計算の仕方(当時は政治と呼ばれていたもの)を可能にしたのはどのようにしてか
- 統治的理性が自らの原則でも目的でもある、基礎でも目標でもある国家を描き出したこと
 - 統治的理性の調整的理念としての国家
 - ◇ 王とは何か?主権者とは何か?行政官とは何か?・・・という国家の要素の本性や関係を構想・分析・定義するしかじかのやり方のこと
 - 国家は、所与のものとなっている知解可能性の原則、すでに打ち立てられている制度的総体の知解可能性の原則(p. 357 l. 2-l. 3)
 - 政治的理性の一つの目的としての国家
 - ◇ 統治術の合理化という操作の果てにあるべきもので、国家理性の介入によって獲得されるべきは国家の完全性・官僚・強化であり、国家の再建
 - 国家とは今あるものの知解可能性の原則でもあり、そうであるべきものもある(p. 357 l. 8)
 - 知解可能性の原則にして戦略的目標、これこそまさに国家理性と呼ばれていた統治的理性を粹づけるもの(p. 357 l. 9-l. 10)
 - 国家とは統治的理性に命令を下して、さまざまな必要性に応じて合理的に統治できるようにはからうもの
 - =国家があるからこそ、国家があるためにこそ合理的に統治する(p. 357 うしろから 6)

【国家理性(三)】(p. 375 うしろから 4-p. 359)

- 国家理性とは国家をきちんとした状態に維持すること(=国家維持)
 - ⇒国家理性には、これとは別の特徴がある
- 国家理性とは国家を増強すること(=国家増強)
 - 回避すべきは誕生、増強、完成、衰退というサイクルで、ここにおいてこそ国家理性は機能する
 - このサイクルが「革命」と呼ばれていたもの
 - 国家を滅ぼすものである「革命」に、本質的に抗して維持することが国家理性
 - ボテロ、パラッツォがいう国家理性とは、ポリスに常に脅威を与える衰退に抗う手段としての統治術、統治するために用いられる手段における合理性(=統治術)のこと

【国家維持のための競合】(p. 360-p 362 うしろから 4)

- ポテロやパラッツォが国家増強と呼んでいたものを支えていたのは、諸国家が競合空間に並びあって位置している現象
 - ↑この考え方は、政治的テクノロジーのあらゆるものに関して、根本的で、新しく、極端に豊穡なものであった
 - 新しい考え方である理由について二つの側面から捉えることができる
 - ①理論的側面
 - 国家は国家自体に向けてのみ聖序されており、外的な目的は持たない
 - 国家の向かう先に開けているのは国家自体に他ならない
 - 国家理性を通して描かれるのは、それぞれの国家の内側に法や目的を持つ複数の国家が永遠にある世界
 - 複数の国家があるということは、今や全面的に開かれたものとなった歴史の必然性自体
 - 開かれた時間、多様な空間性が国家理性の理論に含意されている
 - ②国家の歴史的現実
 - 時間的に開かれた歴史という考え方が明確化されるのに参照されたのは、ローマ帝国から引き継がれてきた古い形式の普遍性の消滅であった
 - ローマ帝国の終わりは 1648 年に位置付ける必要がある
 - 理由：一方では宗教革命による教会の切断が獲得・制度化・認識され、他方では諸国家がもはやその政策・選択・同盟において宗教的帰属によって寄り集まることをやめた(p. 361 うしろから 1-p. 326 l. 2)
 - 帝国と教会という普遍性の二大形式は歴史的・政治的な知解可能性の権力を保持していたが、今や普遍性という水準では召命や意味を失った
 - 今や絶対的な諸単位と関わることになるが、この間には従属関係・依存関係はない
 - この諸単位は、多様化し拡がりをもち強化された経済交換の空間において自己肯定しようとする
 - 自己肯定しようとすることで、自己目的という形式だけでなく、競合関係という新しい形式をもたらし、この競合空間こそ国家理性の原則としての国家増強に関するあの問題に意味を与える
- 【国家理性の分析が発展することとなったスペイン】(p. 362 うしろから 3-p. 364 l. 10)
 - 競合空間における国家増強によってのみ国家を保守できる国家理性の出現は、スペインに関する問題において直接的・具体的な形をとる(p. 362 うしろから 4)
 - イタリアで誕生し定型化した国家理性は、スペインという形で具体化した
 - スペインは普遍的君主制が継承されており、十六世紀以降は植民地帝国・海洋帝国も保持していて、ほとんど独占的な帝国だった
 - しかし、独占状態ゆえに十七世紀には目ざましい、迅速なしかたで貧困へと陥った
 - つまり、スペインで問題となっているのは、国家理性や競合空間に関するあれら全ての考察を

絶対的な仕方で結晶化したプロセスの総体(p. 363 うしろから 8-7)

- 自分のために他の諸国に対して支配的な位置を占めようとすることで、たえず支配という行使自体に脅かされる
- 支配という状況によって革命の犠牲となる
※ここでの革命：国力や支配力を確保していたもの自体がひるがえってその喪失を引き起こすことになる現実的メカニズムの総体

- つまりここには、十六世紀の政治思想において支配的な、依然として地平として役立っていた時間(一つになろうとする傾向を持つ時間、本質的な革命によって区切られ脅かされている時間)から現実の革命を導きうる競合関係という現実によって開かれ、横切られている時間(諸国民の富や力を確保するメカニズムの水準自体における革命)という移行がある(p. 364 l. 7-p. 364 l. 10)

【競合空間が開かれたのは新しいことなのか?】(p. 364 l. 11-p. 365 うしろから 4)

- 対抗関係や対立、競合関係が諸国家間の競合関係(経済的・政治的な領域における、無際限な時間における競合関係)という形で見られるようになったのはどの時点からなのか、をフーコーは捉えたい
 - 適切な境位は君主の富であった
 - 第一の変容：対決の可能性(対決の結果の可能性)を思考・計算・測定するにあたって君主の富を出発点とすることをやめ、その可能性を国家自体の富という形式で思考しようとしたとき
 - 第二の変容：君主の力をその所有物の拡がりから算定するということから、国家を特徴づけるより堅固な力の探求へと移行したとき
 - 第三の変容：君主の力を特徴づけるものが同盟システムだったのが、対決が競合関係に関して思考されはじめると、国力は利の暫定的結合としての同盟によって測定・計算されるようになったとき

【新たな要素としての力、国力】(p. 365 うしろから 3-p. 367 うしろから 3)

- 諸君主間の対抗関係から諸国家間の競合関係へという移行が行われたとき以降、まったく本質的・根本的な概念が発見されおき出しにされることになる
⇒この概念は、力という概念
- 領土の増大ではなく国家増強が、もはや所有物の拡張や結婚による同盟関係ではなく国力の引き上げが、もはや諸王朝間の同盟関係による継承の組み合わせではなく政治的・暫定的な同盟関係における諸国家間の力の構成が、このようなものすべてが政治的理性の必須条件、対象、また知解可能性の原則となる(p. 366 l. 9-l. 11)
- 力の使用・計算を主要な対象とする政治へと入ることとなり、力学の問題に出会う
 - これと同時代に、全く異なるプロセスによって、自然科学(本質的には物理学)が力という概念に出会う
 - ライブニッツを見るかぎりには、この二つの同時代性は当時の人々には全く異質ではなかつ

たと、この同時代性とは何かという問題を考えることは避けられない

- 新しい統制的合理性に関する真の問題は、何らかの力関係の保守、様々な力の力学の保守・維持・発展
- 本質的に様々な力の力学から出発して定義されることになる政治的理性を作動させるべく、西洋は二つの大きな集合を設置した(p. 367 l. 13-l. 14)
 - 第一：外交的・軍事的なタイプの新技術←今回話すこと
 - 第二：内政装置←次回

【外交的・軍事的なタイプの新技術】(p. 367 うしろから 2-p. 368 l. 15)

- 自国は敵国を挑発することなく、自国の消滅や弱体化を導くことなく増強を最大化できる安全システムを見いださなければならない
 - このシステムは三十年戦争の終わりに完全に設置
 - 宗教的・政治的闘争の終わり
 - 自己肯定を主張しうる諸国家を互いに直面するように設置
- このシステムには一つの「目標」といくつかの「道具」が含まれていた
 - 「目標」：ヨーロッパの均衡のこと

【目的としてのヨーロッパの均衡(バランス)】(p. 368 l. 16-p. 372 l. 6)

- ヨーロッパとは何か？
 - 第一に、はっきりと制限された、普遍性のない地理上の切り分け
 - 第二に、それぞれの主権者は自分の王国における皇帝であり、それら国家の主権者のどの一人にも、ヨーロッパを一種の単一の集合とするような優位を指示するようなものはない=複数の国家からなる
 - 第三に、大国と小国という諸国家間に重大な違いがある
 - 第四に、全世界と関係を持っている←これは世界に対するヨーロッパの固有性自体をしるしづけるもの
 - ↑最初は、経済支配や植民地化、あるいは通商における利用という関係だったが、これに多様な諸国家からなる単一性を欠いているが小国と大国の水準差はあるという要素が加わった
- ヨーロッパのバランスとは何か？
 - 第一に、最強の国家とそれに従う諸国家との違いがあるにせよ、それによっても最強の国家が他の国家に自分の法を課すことはできない
 - =最強の国家とその他の国家のあいだの隔たりに制限が加えられることとなった
 - 第二に、限られた最強の諸国家間では互いの平等が維持され、その中ではどの国家も、他の国家が先を行き優位に立つことを妨害することができる
 - 第三に、いくつもの小さな勢力が、それら小さな勢力のうちの一つを脅しかねない上位の勢力の力と釣り合うようにならなければいけない
 - 最強の者たちの力を絶対的に制限すること、最強の者たちを等しくすること、最強の者た

ちに抗して最弱の者たちが結びつく可能性があるということの三つが、ヨーロッパの均衡を構成するために構想・想像された形式

- 一種の絶対的終末論の代わりに生じてくるのは、不安定で脆弱な相対的終末論
 - この終末論とは世界平和のこと
 - 単一の、決定的に異論のない優位をもつものとして期待されているのではなく、相対的な普遍性を持つ平和のこと
 - 期待されている平和は複数性を持つもので、支配のような重大かつ単独の効果は持っていない

【道具としての戦争】(p. 372 I. 7-③へ続く)

- ヨーロッパの構成によって定義づけられる道具は3つある
- 第一は戦争
 - 均衡を維持するためには戦争を行わなければいけない

↑ここには戦争の目的の変化が見られる

 - 中世における戦争とは何か?
 - 戦争は本質的に法的な振る舞いというか、司法的な振る舞い
 - 不正があったとき、法の違犯があったとき、誰かが他のものによって異を唱えられる何らかの法を主張したときに戦争は行われた
 - 公的な次元を持つ私的な戦争であった

(=自分の正当性を守るために戦争が道具として使われていた)

【道具としての戦争】(p. 372 I. 7-374 I. 2)

- これまでとは異なるやりかたで戦争が機能するようになる
- 第一に、戦争は国家の戦争、国家理性の戦争となる
 - 戦争を始めるのに法的な理由づけをする必要はなく、純粹に外交的な者でも構わない
 - 戦争は法的な口実から切り離されて自立する
- 第二に、法権利ではなく、政治との連続性が生まれる
 - この政治とは、諸国家の均衡を維持することを機能とするもの、ヨーロッパの枠内における諸国家のバランスを確保すべきもの
 - この政治があるとき、ある国家に対してある程度まで同盟システムによって戦争を行うことが命ぜられるようになる
 - ⇒「戦争とは他の手段で継続される政治である」という原則が出現する
 - しかし、これは新たな外交的理性・政治的理性の構成とともに獲得されていた変異を事実として確認したことに他ならない

【道具としての外交】(p. 374 I. 3-p. 377 I. 10)

- ヨーロッパというこの新しい集合を構成する諸国家からなる全体によって諸国家の問題や紛争が調節されることとなる
 - この調整とは国家間の均衡が安定的なものとして打ち立てられるべしとする原則に従って

なされる←この根本的原則となるのは諸国家間の物理学

- ここに諸国家間の関係に関する恒常的な装置、帝国の単一性でも教会の普遍性でもない関係装置という考え方が生まれる
- クリュセは、ある内政を企図し、これと同時に諸国家間の恒常的な組織、ある都市に集まって常駐する大使たちからなる諮問組織を企図している
- 諸国家がヨーロッパという空間で一つの社会のようなものを形成し、諸国家が法権利で定め
てコード化するべき関係性を持っているという考えから、ユス・ゲンティウム万民法が発展する
- 法思想の根本的な点の一つ、活動の特に強烈な中心点の一つ
- 新たな空間で共有する新たな諸個人の間の法的関係がどのようなものとなるかを定義づけることが問題となっているから
- ヨーロッパは一つの政治システムをなして、世界のこの部分に住まう諸国民の関係や利によって結びついている一つの体になっている
- 「主権者たちが自分のところで、また他のところで起こっていることすべてにたえず注意を払い、大臣は常に住んでおり[これは常駐外交官のことです]、恒常的に交渉をおこなう。そうすれば近代ヨーロッパは、共通の利によって結びついた互いに独立した構成員が秩序と自由を維持するために寄り集まっている一種の国家のようなものになる。」(p. 376 l. 5-l. 7)

【道具としての恒常的軍事装置の設置】(P. 377 l. 11-p. 378 うしろから 4)

- 第一に軍人の職業化、第二に恒常的な軍備構造、第三に要塞や輸送の装備、第四に知、戦術的考察、いくつかのタイプの策動、攻撃や防衛の図式が含まれる
 - つまり、軍事的な物事やありうべき戦争に関する、固有成り自立的な考察のすべて
 - 平和システムの内部自体に、恒常的な、費用のかかる、重要な知を備えた軍事装備が存在することがヨーロッパの均衡構成に不可欠な道具
 - 均衡の計算や戦争によって獲得される力の維持によって指揮される政治における本質的な部品の一つ
 - これは諸国家間の競合関係における本質的要素の一つであって、それぞれの国家はもちろん自分に有利になるように力関係を反転させようとするけれども、競合関係自体はすべて国家が全体においては維持しようとする(p. 378 l. 5-l. 7)
 - 政治と軍事の複合体は、安全メカニズムとしてのヨーロッパの均衡には絶対に必要
(=平和であるためには戦争が必要ということ…?)
- 【次回に話すこと】(p. 378 うしろから 3-うしろから 1)
- 次回は力という問題へと整序されることになる別の大きい安全メカニズムについて話す
 - 別の道具というのは、内政という政治的装置のこと